7/29 第5分科会 本日の報告の要旨 (小野一)

「脱原発」以後のドイツ政治

―― 放射性廃棄物問題を中心に

1、

反原発運動のシンボル・ゴアレーベン

- **放射性廃棄物処理センター建設計画発表(1977年2月)**
  低い人口密度、旧東ドイツとの隣接が最大の理由か？
  再処理工場、集中型中間貯蔵施設、最終処分場
  ～～そのうち再処理工場は1979年5月に建設断念
- **1980年5月、「ヴェントラント自由共和国」が「独立」を宣言**
  岩塩層のボーリング調査に抗議して、非暴力直接行動
- **キャスク輸送反対闘争(2011年までに12回)**
  膨大な警備費用、脱原発合意の遠因？

2. 候補地選定法(ドイツ)について

- **1999年、最終処分場立地選定のための作業部会(AkEnd)を設立**
  選定手続きへの市民参加を重視
  原子力に否定的・肯定的、双方の専門家が招聘
  2002年12月17日に最終報告書
- **2013年、候補地選定法の制定**
- **同法に基づき、最終処分場委員会が招集**
  2016年7月5日に最終報告書
  「3度目の新出発」？
  社会運動勢力も参加要請されたが、懐疑的意見も

ものの、放射性廃棄物問題を主題
。
、信頼性醸成に寄与し得る。廃棄
事項の原状回復可能性が、その
頁）

日本：NUMO設立、2030年代前半をめどに候補地選定（スケジュールがドイツと類似）
強権的措置への懸念

倉茂治雄『原発ゴミはどこへ行く？』（リベルタ出版、2014年）

可能性（誤謬の訂正可能性）は現代倫
的立場
子力開発に乗り出した時点で、原状回
失われているはず
技術楽観主義
のうち新技術が問題を解決してくれる」
取り出し可能性を否定していたが、この

諸原則ならびに修正可能性志向
も最大限の安全可能性に到達す
能性を求めたことである。原状回
の方向転換可能性は、誤謬の訂
オプション（新たな知見を考慮する
で、信頼性醸成に寄与し得る。廃棄
定事項の原状回復可能性が、その
頁）

3. 放射性廃棄物問題と熟議民主主義

- **最終処分場立地選定過程は民主主義のテスト**
  候補地選定法も市民参加と透明性ある手続き重視
- **熟議民主主義との親和性？**
  討議型世論調査（DP）のしくみ
  日本における実施例（2012年）
- **「熟議」をめぐる思惑は一様でない**
  立地選定過程の「DADアプローチ」の行き詰まり
  ⇒市民参加による正統化、反対派の取り込み
- **最終処分場問題の特性との関連で**
  ⇒NIMBY性を伴う問題で熟議民主主義は可能か

題との関連性

4. まとめ：放射性廃棄物問題の新奇性

- **「負の遺産」であること**
  「原発作らねばよかった」は後知恵的な議論
  未来永劫に続く「負の遺産」の後始末
- **その負担をいかに公平配分するか**
  現行政治体制では、立場の弱い者（地域）に
  負担を押しつけるかたちの「調整」に終わりがち
- **直接責任のない者も負担せねばならない**
  汚染者負担原則？汚染者だけでは負担しきれない
  最大の負担を強いられるのは将来世代
- **反原発運動やデモクラシーの側にも自省必要**
  NIMBY型の反対運動では限界がある